

張友松の新月社批判と魯迅

——徐志摩訳『英国マンズフィールド小説集』の「修改」をめぐる——

星野 幸代

はじめに

一九三〇年一月二八日午後、三弟と街に行き、アルミ製家庭用品八個、計七元を買う、友松に贈る物なり。

二九日朝、掃除婦に友松宛て書簡ならびに家庭用品八個を届けるよう頼む、結婚祝いなり。（「魯迅日記」¹）

「友松」とは当時二七才であつた青年張友松のことである。彼は一九二八年八月―三〇年四月わずか二年足らずの魯迅日記に百回以上登場する。この頻度の高さは、当時魯迅の周辺にいた同世代の文学青年である柔石、馮雪峯らに匹敵する。

二十年代中国文学史上に記されるべき張友松の成果と言へば、春潮書局創設及び『春潮』月刊主宰であろう。いづれも魯迅の厚い援助を受けた。ところで張友松はこの『春潮』誌上で徐志摩の訳著『英国曼殊菲爾小説集（英国マンズフィールド小説集）』の誤訳を指摘し、それにこと寄せて新月社の面々を罵倒したことがある。

徐詩哲の訳文と原書との異同はもちろん修正（原文「修改」）であり誤訳ではない。……かつてバイロンがギリシア語やラテン語を訳した作品にもやはりあちこち誤訳があつたさうだ。バイロンは単なる「詩人」に過ぎず

「詩哲」ではないため、徐詩哲に比ぶべくもないが、少なくとも同じ道を行く者であるから、バイロンが間違つて徐詩哲が間違わないわけがあるうか。(我的浪費―關於徐詩哲對於曼殊斐爾的小説之修改)、『春潮』一卷二期、一九二八年十二月十五日)

恥知らずで有名な「デタラメ(原文「胡説」)博士」はまた鼻持ちならない尊大な態度を示した。……やつらは天地を覆す力があると自負し、自分たちだけで天下の人の耳目を覆い隠せると思つている。彼らはいやしい文章を使って自分を飾り、他人を圧倒する。(並非「零星」敬謝胡博士的告誡―致康農)、『春潮』一卷四期、一九二九年三月十五日)(「……」は中略、以下同じ)

「詩哲」とは、「詩聖」と呼ばれるタゴールが来華した際、徐志摩が率先して接待役を務めたために、世人が志摩に与えた呼称である。以上に挙げた張友松の言葉はあまりに露骨な非難ではあるまいか。彼にここまで言わせたものは、一体何であろうか。

本稿は、魯迅と張友松との交流を追いつつ張の新月社攻撃の背景を読みとくことにより、魯迅傘下の一青年の目に映つていた新月社の一側面を再構成することを目的とする。

一 魯迅と張友松

張友松は初めて魯迅を訪れたとき、張挹蘭^③の弟であると言乗^④つた。張挹蘭とは、一九二七年蔣介石の四・一二クーデターに呼応し北京で張作霖が行つた白色テロで捕らえられ、処刑された「女英烈」である。魯迅は広州でこの事件を旧友李大釗の死として聞いた。

張將軍の虐殺により死んだのは十人余りであつたようだが、……私の知つているのは守常(李大釗)先生だけであつた。……その知らせを聞き……痛みはいくらかあつた。……私の従来からの偏見であるが、同輩の死を見

ても青年の死を見るほど悲しくはないのである。」(『守常全集』題記、一九三三年五月)^⑤
 この「十人余り」の犠牲者の中に張友松の長姉、挹蘭が含まれていたのである。

当時魯迅が勤務していた広州の中山大学でも多くの教員、学生がこの大がかりな共産党員、国民党左派狩りで逮捕され、魯迅はその救出に及び腰な大学当局に愛想を尽かし辞表を出したところであった。魯迅は恐らく前年三月に北京で犠牲になった女師大生たちの姿と若き張挹蘭とを重ね、その死を悼んだことであろう。

さらにこの時の犠牲者には、張友松の「少年学会」時代の仲間もいた。「少年学会」とは友松が北京高等師範附属中学校時代、十数人の同級生及び北京の学生とともに興した結社である。同会は讀書会、補習クラス運営、半月刊『少年』発刊などの活動を行った。また各地の青年結社、例えば曹靖華、蔣光慈らの属した「青年学会」、また夏衍、汪馥泉らの「浙江新潮社」等とも交流があったという。この「少年学会」のリーダー格であった趙世炎が、やはり二七年北京で弾圧の犠牲になったのである。^⑥

張友松は魯迅に対し、姉の死に関連して「少年学会」についても語った可能性は強い。このような経歴を持つ青年張友松は、魯迅に好印象を与えたに違いない。

魯迅に出会う二年前、師とも慕い良き同志でもあった姉が死ぬと、張友松に弟妹と母の扶養義務が重くのしかかった。北京大学での勉強も断念せざるをえなかった。折良く二七年秋、上海北新書局の主人であった李小峯が張友松を編集に雇ってくれた。魯迅が広州を発ち上海へ移ったのも同年九月のことである。

北新書局で働くうちに張友松は自ら書店を興そうと思いたち、「少年学会」メンバーであった夏康農と林熙盛を誘った。二八年彼らはどうにか資金をかき集め、知人から原稿を募り春潮書局をはじめた。だが経験不足のため間もなく経営不振に陥ってしまった。そこで張友松は「有名な進歩的作家」^⑦の作品を掲載することで販売数を伸ばそうと考え、魯迅、周作人、郁達夫、林語堂などに手紙で原稿を依頼した。

ところで張友松が魯迅に初めて会ったのは二八年八月四日である。⁽⁸⁾ その日、李小峯夫妻の招待で魯迅、沈尹默、劉半農、郁達夫、林語堂夫妻、そして張友松は一緒に夕食をとった。周作人を除けば、張友松の援助依頼はこの晚餐会の縁を頼ったものであろう。周作人はかつて少年学会に招かれて講演を行ったことがあり、張友松はそのよしみを通じて彼に頼んだものと考えられる。

彼は著名作家たちが喜んで援助を承諾してくれると樂觀視していた。だから返事をもらう前に『春潮』創刊号（二八年十一月十五日）に春潮社はこれらの作家から原稿をもらうと宣言してしまった。さらに当時魯迅は周作人と断絶し、林語堂との間にも亀裂が入っているのを知らぬまま三者の名を連ねたことが、魯迅の機嫌を損じた。慌てた張友松は魯迅に弁明の手紙を出し、十二月二五日には夏康農とともに魯迅宅を訪問して「粗製濫造ではない、読者に有益な」良書を作りたいのだと書店経営への真摯な思いを語った。⁽⁹⁾ これで魯迅のわだかまりは融けたらしい。以後張は頻繁に魯迅を訪れるようになり、魯迅も張を「很精明」⁽¹⁰⁾と見込んだらしく、張に『奔流』の校正を頼んだこともある。⁽¹¹⁾

当時北平では出版物への締め付けが激しくなり、さらに環境が悪化したため上海へ下る文人は多かった。そのため「上海に新たに開かれた小さな書店は雨後の筍の如く」⁽¹²⁾であったが、「全てが〔北新書局と〕同様に散漫で沈滞きつている」⁽¹³⁾と嘆いていた魯迅は、春潮書局の新風にいささかの期待を寄せたことであろう。魯迅は春潮書局設立と同年同月より自ら朝花社を手がけていたが、柔石らの小説出版を斡旋するなど春潮書局にも眼をかけていた様子なのである。

春潮書局の書籍出版のみならず、『春潮』月刊にも魯迅は大いに助力した。『春潮』月刊創刊号の執筆者の顔ぶれは北新書局編集者もしくは学生ばかりで、比較的著名であったのは孫福熙くらいであろう。⁽¹⁴⁾それが第三期以後は魯迅、林語堂に加えて柔石、韓侍桁ら魯迅の息のかかった文学青年、及び江紹原、趙景深ら魯迅の人脈によると思われる著名人が並ぶようになる。寄稿者層の広がりによって『春潮』の読者層も多少なりと厚くなったことであろう。

魯迅と張友松の往来は二九年に集中しているが、中でも同年八月には二日と間を置かず接触している。これは張友松が魯迅の北新書局を相手とする訴訟に協力していたからである。

北新書局は一九二五年三月新潮社同人であった李小峯が魯迅の支持のもと創設した書店である。以来魯迅は多くの著書をここから出版し、『語絲』を編集、二七年からは『奔流』編集に携わっていたが、二八年三月營業事務担当者が交代した頃から¹⁶⁾北新書局の印税支払いが滞るようになり、魯迅が再三催促してもらちがあかなかった。

魯迅はこのころ李霽野や章廷謙宛書簡で北新書局とのトラブルについてこぼしているが、頻繁に顔を合わせる張友松らにもその苦悩を語った。張、夏康農、そしてやはりもと少年学会会員で春潮書局を手伝っていた党家斌は、魯迅に北新書局を訴えるよう主張し、家斌の知人である弁護士を紹介した。遂に魯迅は八月十二日李小峯に『奔流』編集を辞める意志を伝えた。¹⁷⁾この日より魯迅は張、家斌を伴い弁護士と連絡を取りはじめ、八月十五日の話し合いで訴訟をおこすことに決めた。しかし翌十六日李小峯が和解を求めにやって来たため裁判には至らず、二五日に弁護士宅で調停が行われた。調停の場には李小峯、その兄で北新書局經理の李志雲に加え、李小峯の頼みで広州から駆けつけた郁達夫、章廷謙が立ち会った。

調停が最終的に済んだ二八日、魯迅は李小峯、郁達夫、章廷謙、林語堂夫妻らと晚餐をとみにした。その宴席で林語堂が北新書局との訴訟は張友松に挑発されたからだろうと魯迅を皮肉ったため、魯迅は語堂に向きなおり大声で「私は声明する〔我要声明〕と叫び、険悪な空気が流れた。郁達夫が仲裁に入り林夫妻を先に連れ出したという。¹⁸⁾

胡適が張友松の徐志摩攻撃に反論したのはこの事件より約半年前のことであった。張友松は魯迅張りの文章で新月社を攻撃したことにより、魯迅門下の挑発的な青年という印象を『春潮』の読者に植え付けていたことが、この事件より推測されるのである。

二 張友松の批判その一——徐志摩の誤訳

二八年三月、徐志摩らにより『新月』月刊が創刊された。張友松らが『春潮』を刊行する九ヶ月前のことである。この『新月』の登場が張友松の新雑誌創刊という願望を誘発した、あるいはそれに拍車をかけたのではあるまいか。

張友松が『春潮』一卷二期に発表した辛辣な徐志摩批評文は、話題性をねらい読者を獲得する意図もあつたと思われる。これが発表されると果たして間髪を入れず胡適の反論があつた。『春潮』一卷四期は胡適に対し紙幅の大半を費やし応戦しており、その目録広告は『新月』二巻一号（一九二九年三月十日発行）にも掲載された。逆に張友松も『春潮』掲載文中で『新月』掲載の胡適所感に反論する旨を明言している。つまり互いに論敵雑誌の存在を宣伝し合っているのであり、読者確保という観点からみると両雑誌は協力し合っていたと言えよう。

張友松は新月社面々を攻撃したが、論戦には至らなかつた。直接に反論したのは胡適のみで、他に公に友松を相手にした者はなかつたからである。張友松は『春潮』停刊まで攻撃をやめず、その間『新月』には絶えず「翻訳」関係の文章が掲載されているものの、胡適のように真つ向から友松と対峙したものは皆無である。

従つてここでは論争とみなせる三篇のみを採り、その内容を検討してみたい。それは以下の三つの文章である。

- ① 一九二八年十二月十五日 張友松「我的浪費——關於徐詩哲對於曼殊斐爾的小説之修改」『春潮』一卷二期
- ② 一九二九年一月十日 適之「胡適の字」〔論翻訳〕寄梁実秋評張友松先生評徐志摩的曼殊斐兒小説集』『新月』一卷十一号「零星」欄

③ 一九二九年三月十五日 張友松「並非『零星』——敬謝胡博士的告誡——致康農（夏康農）」『春潮』一卷四期

内容を略紹すると、①で張友松は徐志摩『英国マンスフィールド小説集』に三七カ所の誤訳があるとして、間違ひのそれぞれについて原文と徐志摩訳及び自分の訳を示した。②は胡適が張友松の指摘した所の半分ほどを逐一検討し

たものである。かつてマンスフィールド翻訳を試みたこともある胡適は、自らの訳を付すほどの熱心さで①の大部分は張友松の誤りであると分析したが、いくつかの指摘は正しいと認めた。③は②への応答であるが殆ど翻訳からは離れ、張友松の心情を披瀝したものである。

はじめに張友松による徐志摩の誤訳の指摘は果たして妥当であったのか、胡適の分析を借りつつ検証したい。

胡適が認めた張友松の指摘は次の通りである（下線及び白抜き傍点は張友松が付したもの）。

第一組 (ii) “His horse shied at a traction engine, corner of Hawke Street this morning, and he was thrown out

on the back of his head. Killed.”

「……今朝ホーク通りの角で、その男の馬が牽引車に驚いてはねて、男は放り出されて頭の後ろを打ったんです。それで死にました。」（「園遊会」より）

張友松：「……他的馬看見一個拖貨車的汽機、一下個驚跳起來、就是今早在霍克街駢角的地方、把他扔起來了、擗着後腦。死了。」

徐志摩：「他的馬見了那平道兒的機器、今天早上在霍克路的基角兒上、他那馬見就發傻、一個斜斗就把他擲了下去、擲在他腦袋的後背。死了。」

胡適按：shiedは驚くことであるから、友松は正しく志摩の「發傻の〔狂った〕」は間違っている。on the back of his headは「後腦（後頭部）」と言えばよく、志摩が「他腦袋的後背」と訳したのはまずい。

(十七) She beamed.

彼女はにっこり笑った。（「園遊会」）

張友松：她臉上露出喜色來。

徐志摩：她臉上亮着。

胡適按：beamed を「亮着（輝いた）」と訳すのは不適切である。

(十九)……who never liked to be carried back. “They look beautifully light and feathery, I must say.”

昔のことを思い出すことなんか嫌いな、實際家のシヨースは言う。「シエークリームが」軽くふわふわした感じで本当に見事だわ」（「園遊会」）

張友松：她從來是不喜歡聯想從前的事的。「它們（餅子）顯得這樣輕巧，這樣光沢，真是可愛哩，我說」。

徐志摩：她從不想回到從前去的。「他們看得這樣美麗的輕巧，羽毛似的，我說」。

胡適按：look を「看得」と訳すのは不適切である。

胡適の判断はいずれも正しいが、(十七)の志摩訳などは許容範囲といえるのではなからうか。

次に胡適が、志摩は間違っているが張友松の訳も違つとした例を見てみよう。

第一組 (一) It is all the fault, she decided, as the tall fellow drew something on the back of an envelope,

something that was to be looped up or left to hang, of these absurd class distinctions.

みんなこの下らぬ階級的差別のせいだ、と彼女は判断を下した。その時背の高い男は封筒の裏に何か、輪に結んで括つておくか、そのまま垂らしておくかするものをしきりに描いていた。（「園遊会」）

張友松：這時候那高個子在一隻信封的背面画一個什麼東西——一個要被捆起來或是將被絞死的東西、她一面望着，心裏便想，這完全是階級界限的錯處。

徐志摩：她心裏打算，一面那高個的工人正在一個信封的後背面什麼東西，錯處就在那些個可笑的階級區別、槍斃或是絞死了那一点子就没有事了。

胡適按：友松、志摩どちらも間違っている。文法的に主節は

“It is all the fault … of these absurd class distinctions,” she decided.

従属節は

As the tall fellow drew something on the back of an envelope, something that was to be looped up or left to hang.

志摩が something that was to be looped up or left to hang を主節につなげているのは大きな間違いである。張氏は文法的には間違っていないが、この段の意味を取り違えている。

胡適訳：這時候那個子在一個信封背後画点什麼東西、——画了就搓成团或隨手丟開的東西。

張友松③の再訳：一個要被摺起来或是讓它懸着的東西。

ここは天幕の張り方を描写したところであるから、張友松の二度目の訳が最も適切であろう。

次に胡適が張友松自身の誤りを指摘した例を挙げよう。

(五) She had thought in the shop: "I must have some purple ones to bling the carpet up to the table."

彼女は店で考えた、「じゅうたんを食卓に近づけるためにどうしても紫の果物が必要だ。」(「幸福」より)

張友松：她在舖子裏的時候就想過：「我一定要買点紫的(花)、才好使地毯和桌子上的顏色調和。

徐志摩：她在舖子裏就想了：我得要点兒紫的。去把地毯挪上桌子来。

胡適按：小説にはつきり紫の葡萄と書かれているにも関わらず、張氏は無理に「紫」を花に変えてしまった。

小説の前後関係から考えると胡適の意見は正しい。張友松が誤訳の指摘に夢中になるあまり小説自体を十分に味わっておらず、また不注意であることを暴露している。これに対して張友松は③で次のように言い返している。

それ「葡萄」と「花」を誤ったこと」がどうした。前文が葡萄ならここでも葡萄、前文が花ならここでも花だ。……(ここは自分が間違っていたとしても)、徐志摩の薄い訳書一冊から何千何万の間違いが見つかるやも

しない。

これでは単なる負け惜しみである。

胡適が取り上げた他に、張友松の指摘が或いは正しいといえるかもしれない例がある。それは徐志摩が「darling, precious, sweet」の類の言葉はみな『乖乖』と訳している」のに、dearieを「的利」、sweetieを「司威第」と音訳した点である。欧米で四年間過ごした徐志摩が「dear が dearie に、sweet が sweetie と変化することを知らなかった」とは到底思えないが、これを意識と音訳の不徹底さを突いたと解釈すれば、友松の指摘は一応もつともであると言えよう。

胡適が「志摩は全く間違っていない」とした張友松の指摘の大半は、友松と志摩の翻訳に対する姿勢の違いに根ざしていると思われる。すなわち友松が原文の意味を正しく伝えることを重視するのに対し、志摩は雰囲気及び原文のリズムを伝えることに重点を置くのである。²⁶

張友松の分析には少々お粗末な点があり、後に翻訳家となった若者として面目躍如たる指摘には乏しい。但し上述したように三七カ所の原文と志摩訳、友松訳とを対照させた①¹がかなりの労作であることは否めない。

彼がこのように多大な労力を費やした理由は、この文章が多くの読者の関心を引きつけると確信していたからである。従つてこの労作は友松の真のねらい——新月社攻撃、後述——とは裏腹に、徐志摩の著作『英国曼殊菲爾小説集』が知識青年の中で広く読まれていたことを示唆している。すなわち青年達のマンスフィールド受容の一樣相をも示していたのである。²⁶

三 張友松の批判その二——新月社攻撃

①③の張友松の文は一貫して非常に皮肉で攻撃的である。それは何に由来しているのであろうか。

張友松は上述の文章を書く二、三年前、北京大學で徐志摩の英文学の講義を聴講したことがある。その感想を彼は次のように述べる。

徐志摩の授業を聞いたことを思うとかつとなつてしまい、孟子の「一夫の紂を誅するを聞くも、未だ君を弑するを聞かず」を思い出す。私は徐志摩が北大で私を数十時間も騙したことだけは知っているが、彼の「授業」とやらを聞いた覚えはない。仮に徐志摩という高等なはったり野郎を罵倒してはならないと言うなら、天下はさぞかし太平なことであらうよ。

ここに、やはり徐志摩の授業を上海光華大學で受けたことがある趙家璧（一九〇八）の文章を並べてみよう。

徐志摩の授業を選択した同級生はみなこの詩人に教授の尊大ぶつた様子が全然ないこと、溢れる活気、活発な思考、深く博い知識、広範な興趣を感じとつた。……彼は話し、笑い、表情豊かで、身ぶりを交え、時に浙江なまりの普通語を、時に流ちょうな英語を使った。実に炎のように、学生一人一人の心を明るく照らした。

二者の印象は何と隔たりがあることか。趙家璧の描写したカリスマ的な魅力を除いても、徐志摩はその学歴と翻訳などの実績を考えればかなり高レベルの講義を行つていたはずであり、張友松の感想はある種の偏見から出ているとしか思えない。

先に張友松が引いた孟子の言葉は、次の文に続くものである。

仁を賊^{そこな}う者、これを賊といひ、義を賊う者、これを残^{せき}という。残賊の人はこれを一夫という。

これは孟子の革命是認の思想が展開されている部分である。民衆を大切にしないために民衆から見放された君主はもはや一夫に過ぎず、誅罰されねばならない。張友松の文脈で解釈すれば、民衆を大切にしない一夫——徐志摩たちを革命的民衆——自分たち青年が誅罰すべきだということになる。

また彼は新月社面々を合わせて次のように攻撃する。

私は真に青年指導者たる先輩に対してはよく理解して敬愛し親しくなりたいたいと思つてきた。胡博士と陳教授にも、尊敬の気持ちを持たなかつたはずがあるうか。だが自ら青年との隔絶に甘んじる人には遠慮はしない……私
 が他の人ではなく徐志摩を罵倒したのは、彼や胡博士といった連中が互いに褒め合い、そのために人をペテンに
 かけることが特に多いからだ。まして彼らは実に目障りなので、翻訳の問題がなくともいつか彼らに失敬に及ぶ
 ことは禁じ得なかつたであらう。

ある友人が私に勧めた。「胡適之の連中はもう墓の中の人なのに、なぜ彼のためにこんなに長時間をムダにするんだ?」……胡博士が墓の中の人だと知つてはいるが、死体が人を捕まえるのも恐ろしい、未だ向上心を失わぬ青年は必ず彼を墓に送り返さねばならない。

張友松の言い分をまとめると、新月社は地を揺るがす権力を持ち、「かつて青年達の信望を集めていたが墮落した」「純粹な青年」の敵である。互いにかばいあい、罪を隠蔽する。だから「青年の熱い血で彼らの汚い面をすすぎ」「墓に送ら」なくてはならないということになる。

これらの主張はいずれも魯迅が女師大論争、またはそれに続く閑話論争²⁹で述べたものである。さらに友松の文章には魯迅が一連の論争で用いた「詩哲」、「学者」、「君子」、「喫面包〔パンを食べる〕」等の、新月社メンバーを指す代名詞が散りばめられている。張友松が魯迅陣営の一翼を担うつもりで新月社を攻撃したことは明らかである。

但し友松のいう「青年の熱い血」は三・一八事件の流血ばかりではなく、姉張挹蘭及び彼女とともに犠牲になった青年たちの血をも指していた。というのは、彼の文章に少々唐突だが次のような言葉が現れているからだ。

あなた方は……私を名誉毀損の罪で訴え、朝廷に働きかけて私を「アカ」だとして捕らえ警察に突き出すこともできる。

このとき張は姉挹蘭の逮捕の場面を想像していたに違いない。

四・二クレーターの際、胡適は米國講演旅行から帰國の途にあつたが、事件を知り急遽横濱に逗留することにした。胡適はそれまでの言論、また友人に革命的人物と共産黨員がいたことにより、北洋軍閥のブラックリストに載っていたからである。彼は日本にいる間に蒋介石の反共を肯定する発言をした上で、五月に帰国した³⁰。それが張友松の目には、姉挹蘭らと同様に逮捕される可能性のあつた胡適が蒋介石におもねり一命を得たと映じ、特に許しがたい背信行為に思われたことであろう。なお徐志摩訳『英國曼殊菲爾小説集』が北新書局から出版されたのは、奇しくもこの四月であつた。

魯迅に期待される「青年」たらんとする自負、当局に姉を殺された無念、日和見的な傾向のある新月社面々に対する嫌悪、加えて欧米留学コンプレックスが、こもこも相まって張友松に「いわゆる詩哲文豪たちの本来の面目」を魯迅に続いて暴かんとする文章を書かせたといえよう。

胡適は③の発表された翌月より、突如『新月』誌上で国民党政治批判を展開しはじめる。これを張友松の「挑発」の結果と考えるのはあまりに短絡的であろうか。

張友松の奮闘に対して魯迅は直接に言及したことはない。但し『春潮』が敢えなく停刊して四ヶ月後に発表された「硬訳³¹と文学的階級性³²」に次のような言葉がある。

新月社の「厳正な態度」や「眼には眼を」は、とどのつまりは力が同じ類か、あるいは力が劣る人にもつばら行われるのであり、力のある者に眼が腫れるほど殴られたら、前例を破り、ただ顔を手で覆って「君の目に気を付けたまえ」と叫ぶのみなのである³³。

これは直接には梁実秋に応えた文章である。「厳正」とは梁実秋が「論批評的態度(批評の態度を論ず³⁴)」において、最近の人は批評を個人攻撃と混同している、理想的な批評の態度は「厳正」なことである、と述べたのを受けてい

る。この文の発表時期から考えて、梁実秋のこの文章は多分に「春潮」へ向けられた批判と考えられる。従って先に挙げた魯迅の文章は、新月社よりも「力が劣る」にも関わらず彼ら相手に奮戦した張友松へのねぎらいの意味も込められていたのではなからうか。

①③が発表されて後、友松と魯迅の交流頻度は急速に増していく。「春潮」の新月社攻撃により、魯迅は青年張友松への信頼を深めたいと推察されるのである。

結 び

一九二九年十一月二日 午後友松来る、五百元を貸す。(魯迅日記²³)

このとき張友松が魯迅に借金したのは、春潮書局を立て直すべく計画した「春潮文芸叢書」の資金とするためであった。だがこの企画も資本不足のため半年も経たないうちに頓挫してしまった。²⁴

翌三〇年二月十三日、魯迅は上海で成立した中国自由運動大同盟の発起人の一人として名を連ねた。そのため国民党から逮捕令が出され、魯迅は三月十九日より内山書店の一室に身を隠し、一ヶ月後に自宅に戻る。その帰宅前後に書簡を交わした記事を最後に、魯迅日記から「張友松」の名がふつつりと消えている。

春潮書局は張友松と夏康農——労働大学教授となり春潮書局には不熱心になっていた——との断絶が直接の原因となって人手に渡り、失意の張友松は三一年一月頃北京へ移った。このとき彼は魯迅に春潮書局倒産を伝える手紙を出した。同年七月漸く青島で教職を得ることが出来、魯迅に手紙で青島へ療養に来たらどうかと勧めたところ、有り難いが上海を離れられないと返事が来た。²⁵以後張友松は魯迅と接触することはなかった。

北京に移って以後はともかく、張友松がまだ上海にいた三〇年四月から三一年一月にかけて、魯迅との往来に空白があるのはなぜであろうか。張友松は書局経営に奔走していたため、また魯迅からの借金を生かせなかった後ろめた

さのため魯迅宅から足が遠のいていたのだろうか。或いは実のところ国民党の魯迅指名手配のピラに言う「墮落文人魯迅」に関わることを避けたのだろうか。「空白」が中国自由運動大同盟、左翼作家連盟成立直後に当たたることを考へると、新婚のうへ扶養家族が多かった張友松が保身を図ったとの憶測も可能であろう。「空白」直後三一年二月の柔石、殷夫らの処刑は、この説を裏付けているとは言えまいか。

張友松の転向にも類した行動はさておき、政治的要人と親しかった胡適、徐志摩、陳源を上述のように罵倒することは生半可な覚悟では出来なかつたはずである。張友松が当局から睨まれたかどうかは定かではない。だが少なくとも「春潮」主宰時には、彼は得意の翻訳を武器に、自分が体制側と見なす相手と半ば命がけて戦っていたと言えよう。反面、彼の文章は新月社を支持する広範な青年層の存在をも浮かび上がらせてしまふのだが。

魯迅の後援を得た『春潮』を盾に一時ながら孤軍奮闘した張友松の姿は、魯迅と新月社の対立を考察する一つの視点を提供し、また同時代マンスフィールド受容の『草の根』的状况を伝えてくれるのである。

注

(1) 『魯迅全集』第十四卷、人民大学出版社、一九八一年、八〇七頁。

(2) 張友松、張挹蘭の経歴をここに略紹しておく。

張友松（一九〇三—）湖南醴陵の人。家は没落した小地主、祖父は秀才で私塾を経営し、父も秀才で北京の下級官僚であったらしい。北京高等師範附属中学在学中、「少年学会」結成。一九二一年中学卒業後スマトラ島で華僑小学校教師、この間に父が逝去。二三年夏解雇され帰国。北大予科に通う傍ら『京報』記者などをして弟妹を養う。二五年翻訳作品を発表し始める。二七年北大英文系で学ぶが退学、上海北新書局で編集を担当。二八年魯迅の指示のもと春潮書局創設。三〇年青島、長沙、重慶などで中学教員を勤める。抗戦期は重慶で編集活動。解放初期、重慶作家協会と青年文聯の準備に参加する。建国後は人民文学出版社で文学翻訳に従事し、マーク・トウェインの翻訳作品が多い。

張挹蘭（一八九三—一九二七）張友松の長姉、本名蘭秀。祖父から初等教育を受ける。十八歳頃、自作農の龍家に嫁ぐ。一人息子を疫病で亡くす。一九一九年婚家より学資をもらい北京へ、長沙の女性運動家李欣叔と知り合う。二〇〇年北京女師大予科に入学。二一年友松とともにスマトラへ、二三年帰国。北大予科に入る。離婚。二五年四月中山主義實踐社に入り、左派国民党員となる。二六年国民党北京市党部長。『婦女之友』創刊に参加。二七年四月六日未明、自宅で張作霖指揮下の密偵に逮捕される。処刑までの二十日間拷問に耐え、誰も彼女のために連座した者はいなかったという。四月二八日午前、李大釗ら二十名に死刑判決が下り、午後には絞首刑が執行された。張挹蘭は二十名中で唯一の女性で、「特にござっぱりと身なりを整え、髪もなでつけ」、「顔に喜色を浮かべ、顔を上げて胸を張って」刑場に入り、三時間にも及ぶ刑の最後に処刑された。（参考：張友松「同李大釗一起犠牲的張挹蘭烈士——記我姐姐的一生」、『時代の報告』、一九八〇年第三期。張友松、石宣、李滄明著「第二十個犠牲者——記挹蘭烈士」、『中華女英烈（二）』中華全国婦女連合会編、人民出版社、一九八一年八月。）

(3) 注(2)参照。

(4) 許広平「魯迅和青年們」、馬蹄疾輯録『許広平憶魯迅』広東人民出版社、一九七九年、二二六頁。

(5) 前掲注(1)『魯迅全集』第四卷、五二二—五二四頁。

(6) 少年学会については張允侯他編『五四時期的社団(三)』（三聯書店、一九七九年）の少年学会の項を参照した。なお同書所収の「少年学会會員録」及び「会務紀要」においては、張友松は「張鵬」（前掲注(2)）張友松「同李大釗一起犠牲的張挹蘭烈士——記我姐姐的一生」に拠れば友松の学名）の名で記載されている。

(7) 張友松「魯迅和春潮書局及其他」、北京魯迅博物館編『魯迅研究資料(七)』天津人民出版社、一九八〇年、九五頁。なお春潮書局設立とその後の経緯は当資料によった。

(8) 魯迅日記にこの日初めて張友松が登場することによる。

(9) 魯迅日記によると、張友松、夏康農は前日二四日に二人そろって初めて魯迅を訪問したが会えず（『魯迅全集』学研一九八六年訳注には「この日の訪問はその『春潮』広告の』経緯説明のためと思われる」とある）、翌日は面会することが出来た。

(10) 前掲注(4)「魯迅和青年們」、一三五頁に許広平の感想として見える。

- (11) 魯迅日記二九年五月十日及び注(一)、前掲注(一)『魯迅全集』第十四卷、七六三、七六六頁。
- (12) 前掲注(6)「魯迅和春潮書局及其他」、九五頁。
- (13) 「二九年三月十五日付致章廷謙」、前掲注(一)『魯迅全集』第一卷、六五五頁。
- (14) 魯迅の斡旋により春潮書局から出版された著作は、筆者が知る限りでは次の三冊である。葉永蓀『小小十年』、魯迅「小引」付(初出『春潮月刊』第一卷第八期、二九年八月十五日)、一九二九年九月。柔石「二月」、魯迅「小引」付二九年十一月。ミューレン著、許霞(許広平)訳「小彼得」、魯迅「序」、一九二九年十一月。
- (15) 『春潮』は日本では見ることが出来ないため、その目録は『中国現代文学期刊目録彙編』天津人民出版社、一九八一年所載のものを参照した。
- 目録で見る限りでは、『春潮』の内容は創作作品が一番多いが、評論、書評も殆ど每期含まれている。翻訳もソ連、英、米、仏、ギリシアの創作・評論に及ぶ。全体的な傾向があまりはつきりしないが、ソビエトロシア関係の文章の比率が若干多い。
- なお本文で言うところの①③は黄英哲氏(愛知大学現代中国学部助教授)に提供して頂いたコピー、「編輯室の話」は筆者が北京大学所蔵『春潮』より筆写したものに拠った。
- (16) 「二八年三月十六日致李霽野」注(3)によれば、二八年三月十五日に李小峯の兄仲丹(北新書局の営業事務責任者)が死去している(前掲注(一)『魯迅全集』第一卷、六一六頁)。
- (17) 「二九年八月十一日致李小峯」、前掲注(一)『魯迅全集』第一卷、六八一頁。魯迅日記によるとこの書簡は翌日十二日に出された。
- (18) この事件の顛末は魯迅日記二九年八月二八日の項及び注(8)(前掲注(一)『魯迅全集』第一四卷、七七八、七七九頁)、及び郁達夫「回憶魯迅」(原載『宇宙風乙刊』創刊号、三九年三月一日、『郁達夫文集』第四卷、香港三聯書店、一九八二年所収)に拠った。
- (19) 私的な反論としては、張友松③によると胡適の反論が発表される前に陳源から「あまり辛辣過ぎてはいけない」という主旨の手紙が来たという。
- (20) 張友松「黔驢之技——浪費之三」(『春潮』一卷七期、二九年六月十五日)、「論直接翻訳と転訳」(『春潮』一卷九期、

二九年九月十五日)など。なお「春潮」は九期で停刊となり、同期「編輯室的話」には「我々はこれで(攻撃を)々やめにする(原文「帯住」。女師大論争の終盤に徐志摩が「帯住」と呼びかけたのに対し、魯迅が「我還不能『帯住』」と反論したのを受けている)々つもりである」と述べられている。

- (21) 徐志摩は「説『曲訳』」(署名「摩」、『新月』二卷二号、二九年四月十日)で、「マンスフィールドの訳文に関しては私はもはや話す必要はないであろう」と述べている。他にこの時期『新月』に掲載された翻訳関係の文章には、畢樹棠訳「論訳俄国小説」(ロンドンの“Contemporary Review”所載文の訳、『新月』二卷三号、二九年五月十日)、西澁(陳源)「論翻訳」(『新月』二卷四号、二九年六月十日)などがある。

- (22) 本文②によると胡適は二三年にマンスフィールドの小説「心理」を半分まで訳したことがある。

- (23) 張友松は①において先ず原文を見なくとも「玄妙であると分かる」所として(二)〜(七)と番号をつけて列挙し、次に原文と対照させると「玄妙である」所を(一)〜(三十)まで挙げている。つまり(二)〜(七)が二種類あるため、胡適は前者を「第一組」、後者を「第二組」と区別した。

- (24) 邦訳は黒沢茂訳『マンスフィールド全集』垂水書房、一九六六年を参照した。

- (25) 二者の翻訳に対する姿勢の相違が端的に現れていると思われる訳例を挙げておく。

二組 (11) *Jose, the butterfly, always came down in a silk petticoat and a kimono jacket.*

めかし屋のジョーズはいつも絹のペチコートにキノノ風の上衣を引っかけて食事に降りてきた。

張友松：珠斯那愛穿花衣的孩子总是穿着一條綢裙和一件日本式的花衫走過來。

徐志摩：玖思、那蝴蝶兒，每天下來，总是穿着裏裙，披着日本的花衫子。

- (26) 二十年代中国のK・マンスフィールド受容については拙稿「凌叔華と『新月社サロン』——恋愛結婚・核家族制度及びマンスフィールドの受容をめぐって——」(署名大槻幸代、『日本中国学会報』第四六集、日本中国学会、一九九四年)で詳述した

張友松①に見られるマンスフィールド受容を示すエピソードを以下に紹介する。張友松が①を書いたきっかけは、友人にマンスフィールドの小説はチェーホフよりも良く、また「他人の訳を読んでこそ自分が伸びるものだ。マンスフィールドの小説は徐志摩氏が一冊訳しているから、中文と英文と両方買って研究する」と言われたからだとい

う。さらに友人はこう言った。「徐先生は知つての通り中国で英国近代文学に最も造詣の深い一人で、マンスフィールドを特に好んでいる。数年前彼が『小説月報』であの「マンスフィールド」という文を発表すると、どれほど多くの者が熱狂的に捧げて郎唱したことか知れない、暗唱した者までいた。なお張友松自身は彼女の小説について次のように感想を述べている。「友人がチェーホフよりいいと言つたのには敢えて賛成しないが、マンスフィールドの作品を読んだ確かに満足した。友人に感謝する」。

(27) 『孟子』梁惠王下篇。金谷治はこの部分について「一夫というのは、民衆の支持を失つたことを意味する端的な表現である」と述べている(『孟子』、岩波新書、一九六六年、九三頁)。

(28) 趙家璧『徐志摩和『志摩全集』——紀念詩人逝世五十周年』、『新文学史料』、一九八一年、第四輯、八八頁。

(29) 女師大論争の説明は省略する。閑話事件とは女師大論争が下火になつた頃、徐志摩が発表した『閑話』引出来的閑話(『晨报副刊』二六年一月十三日)が発端となり魯迅、周作人、陳源、林語堂、劉半農らにより三週間ほど繰り広げられた論争を指す。胡適もこれに対し周兄弟、陳源に宛てて仲裁の手紙を書いた(二六年五月二十四日)。

(30) 耿雲志編『胡適年譜』中華書局香港分局、一九八七年、一〇一頁。

(31) 例えば張友松③に次のようなくだりがある。「……私は(英文の)會話(の学習)に費やした時間が少なすぎるばかりか、本(の学習)に費やした時間もゼロに均しい。無数のパンを食べてきた詩哲博士の流と並べて比率を出そうとしても、数学の本によつても解けないかも知れない」。

(32) 『編輯室的話』、『春潮』一卷五期、二九年四月十五日。

(33) 前掲注(1)『魯迅全集』第四卷、二二二頁。

(34) 『新月』二卷五期、二九年七月十日。

(35) 前掲注(1)『魯迅全集』第一四卷、七八六頁。

(36) 「三〇年八月十七日付李霽野宛書信」、前掲注(1)『魯迅全集』第一二卷六頁。

(37) 前掲注(6)「魯迅和春潮書局及其他」、一〇六一—一〇七頁。なお張友松はこの青島から自分が送つた書簡及び魯迅の返信は魯迅日記三二年七月二十八日の「午後張子長より手紙、すぐに返信。」に当たる、つまり「張子長(『魯迅全集』人民文学出版社版注では不詳。学研版はこれを「張子振」と誤植している)」とは張友松を指すと主張している。